

(資料紹介)

板橋宿「伊勢孫文書」の調査報告と史料紹介2

— オンデマンド型授業の実践例 —

遠藤 ゆり子

〈要約〉

本稿は、淑徳大学人文学部歴史学科の二〇二二年度(前期)の授業「日本地域史」における成果をまとめたものである。二〇一七年に開講した「日本地域史」の授業では、板橋区をフィールドとした地域史研究に取り組んでいる。二〇一九年度には、板橋宿の旅籠屋に伝来した近世・近代の史料「伊勢孫文書」を調査し、翻刻した成果を紹介した。二〇二一年の授業はコロナ禍で行われたため、学生が文書調査に参加することはできなかった。だが、「伊勢孫文書」を所蔵する板橋区立郷土資料館のご厚意により、筆者による文書調査が許され、学生は筆者が撮影した史料の写真から翻刻を行うことができた。本稿は、学生が作成した「伊勢孫文書」の翻刻を許し、筆者が訂正を加えた史料二十七点を紹介するものである。また、コロナ禍の感染症対策として、本授業はオンデマンド形式のオンライン授業で実施された。フィールドワークやグループワークといったアクティブラーニングをともなうオンデマンド授業の実践例として、事例紹介も兼ねた内容となっている。

〈キーワード〉

板橋宿 伊勢孫文書 史料紹介 フィールドワーク オンデマンド授業

はじめに

本稿は、淑徳大学人文学部歴史学科の二〇二二年度(前期)開講授業「日本地域史」の成果をまとめたものである。本授業は、東京キャンパスがある板橋区の歴史を明らかにすることを通して、歴史学を学ぶ手法を身につけるとともに、歴史を学ぶ意義を考えることを目的として二〇一七年度に開講された⁽¹⁾。二〇一九年度からは、板橋に伝来する「伊勢孫文書」の調査を実施している⁽²⁾。

「伊勢孫文書」とは、江戸時代に中山道の宿場町であった板橋宿で、旅籠屋を営んでいた伊勢屋孫兵衛家(屋号「伊勢孫」)に伝わる文書群である⁽³⁾。現在は板橋区郷土資料館が所蔵している。同文書の一部は、区史編さん収集資料として、板橋区公文書館で写真を閲覧することができる。だが、全ての史料が写真帳に収まっているわけではなく、また写真のデジタル化も行われていない。そのため本授業では、デジタルカメラでの写真撮影と法量の計測、翻刻作業を少しずつ進めることとした。

しかし、二〇二〇年度はコロナ禍にあって史料調査を行えず、授業内容を大幅に変更せざるを得なかった⁽⁴⁾。二〇二二年度も、新型コロナウイルス対策として、本授業はオンデマンド形式のオンライン授業となった。また、東京都も緊急事態宣言が発出されたため、様々な制限があるなかで授業の進め方を模索してきた。

当初の予定通りではなかったが、板橋区立郷土資料館のご厚意により、本年度も「伊勢孫文書」の調査を行うことができた。そこで本稿では、

学生とともに新たに翻刻した「伊勢孫文書」の史料紹介を行うことしたい。併せて、コロナ禍二年目に、オンデマンド授業でおこなった実習系授業の概要をまとめ、一つの記録としてとどめたいと思う。

1 授業の形態と概要

(一) 授業形態 ―オンデマンド形式のオンライン授業―

まず、本科目の授業形態について説明しておきたい。

コロナ禍二年目となった二〇二二年度は、対面での授業は必修科目が中心となり、本科目はオンデマンド形式のオンライン授業に指定された。授業時間も、六限(18:15~19:45)に設定され、昨年度のようにZoomミーティングなどを活用したリアルタイムのオンライン授業は原則禁止となった。これらは、収容人数が多い教室数を確保し、対面授業とリアルタイムのオンライン授業の混在を防ぐためにとられた措置である⁽⁵⁾。

そのため本年度の授業では、Google Classroomを活用した課題提示型で実施した⁽⁶⁾。

(二) 授業の概要

本授業の履修者は五十一名(四年次生が一名・三年次生が三名・二年次生が四十七名)であった。ここでは、半期十五回の授業の概要を整理しておきたい。

【第一回目】ガイダンス

授業の進め方や注意点(課外授業にともなう振替休講があること、ラ

ンダムに結成されたグループのワークがあることなどを動画で説明し、内容を確認したかをGoogleフォームで回答させた。また、板橋区立郷土資料館のHPにある「常設展示」動画や『日本歴史地名大系 東京都』（平凡社）の項目「板橋区」などを見ながら、板橋に関するクイズを三つ考える課題を出した。クイズを出題させたのは、楽しみながら板橋の歴史に関心を持ってもらいたいと考えたためである。クイズ作成時には、できるだけ他の学生と重複しない問題にするよう伝えている。

また、毎回、学生からの質問や意見をGoogle Classroom上で受け付けることをアナウンスした。

【第二回目】板橋(宿)の歴史を学ぶ

まず、前回の課題「板橋に関するクイズ」から二問選び、テスト機能を設定したGoogleフォームから出題した。その上で、板橋の中世、板橋宿の近世・近代をテーマとした説明動画二点を作成し、動画を視聴してさらに調べ学習を進める課題を出した(提出はGoogleフォーム)。調べ学習では、参考文献の回答欄も設けて、できるだけ文献を調べるよう促した。後日、課題の成果を一覧表にし、全てに簡単なコメントをつけ、フィードバックとしてクラスで共有した。学生が互いの関心を確認し合うという形ではあるが、互いの交流を促し、他の学生と比較することで自らの課題を客観的に評価することになったと思われる。

【第三・四回】板橋宿跡のフィールドワーク

前回同様、板橋に関するクイズを二問出題した上で、学生個々が実施する板橋宿跡のフィールドワークとレポート(見学記)を提出させた。事前にコースを指定し(出発地と到着地の交換は可)、地図を配付して、見

学コースとポイントとなる史跡についてGoogle Earthを活用したスライドで説明した。フィールドワーク実施期間は、当初は四月二十三日～五月二日を予定していたが、東京都に緊急事態宣言が発出されたため、最終的には六月八日まで延期した。なお、不測の事態にも対応できるように、事前にフィールドワークの計画書(予定)を提出させている。

【第五回】文書調査の準備

今回の授業で予定していた板橋区立郷土資料館での文書調査に備え、事前準備のための動画を作成した。内容は、調査の概要説明、「伊勢孫文書」の解説、文書撮影の意義、今回の課題への取り組み方の説明である。文書撮影の方法と注意点に関しては、佐藤大介編・NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク発行の「歴史資料保全活動におけるデジタルカメラによる文書資料撮影の手引き」を活用しながら動画で説明を加えた。

【第六・七回】板橋区立郷土資料館の見学と古文書の読み方

五月二十一日(金)の午後に予定していた文書調査が中止となった。東京都下の緊急事態宣言により、資料館が休館になったためである。だが、その代替措置として、板橋区立郷土資料館のご厚意で教員のみが文書調査を行うことができた⁽⁷⁾。そのため、履修者は教員が撮影した史料の写真を使って、古文書の読解と翻刻作業をすることとした。

これを受けてこの授業回は、①古文書を読んでみる、②板橋区立郷土資料館および隣接する赤塚城跡を見学する、という内容に変更した。①は、いわゆるくずし字を読む際に、便利な辞典やHPの紹介をした上で、既に撮影済みの「伊勢孫文書」一点を読み、翻刻を提出するというものである。後日、解答を配付して、各自でフィードバックを行うこととし

た。②は、事前に計画書(予定)を提出させ、見学記を提出するという課題である。期間は六月一日～三十日で設定した。

【第八回】各自で翻刻を作成する ―その1―

五十一名の学生を四～六名の十グループに分け、各グループに一点ずつ史料を配付して担当させた。だが、課題は個々の学生がそれぞれ取り組み、翻刻の成果を提出することとした。課題の取り組み方については、動画で説明をしている。フィードバックとして、提出された翻刻をもとに、読み間違いが多かった文字、頻出する文字やフレーズについて解説する動画を作成した。

【第九回】各自で翻刻を作成する ―その2―

各自が提出した翻刻をグループごとに十のファイルに整理し、全員の提出物を閲覧できる設定にした。これらを参考にしつつ、前回と異なる二つ目の文書を翻刻する作業を課題とした。ただ、文字数が多い史料を担当したグループは、第八・九回の二回で一点の文書を前半・後半に分けて課題とした。

【第十・十一・十二回】グループで翻刻を作成する

第八・九回の授業で、各自が作成した翻刻をグループごとのファイルに整理し、全員の提出物を閲覧できるように設定した。その上で、一グループにつき一つのGoogleドキュメントを共同編集することで、一つの翻刻を協力して作成することを課題とした。

所謂フリーライダーを出さないため、事前に史料翻刻の範囲を話し合いで決めるよう指示をした。話し合いの方法は各グループに任せだが、Googleドキュメントを使い、グループ内でchatをしたり、伝言を残せた

りする仕組みを作って周知した(図1)。これを使うことで、学生間のコミュニケーションの様子や作業過程もある程度把握することができた。また、Google ClassroomのMeetも、話し合いのために自由に使用できることとした。

ただ、史料を読む力は学生によって区々であったため、史料翻刻の担当範囲は、授業回ごとに替えた。ここでグループ内のコミュニケーションが不十分だと思われる場合は、教員の方で学生の担当範囲を指定するケースもあった。

授業後は、提出物を見ながら読めていない文字、読みが間違っている文字について、ヒントを与えながら説明する動画を作成した。学生は、これを視聴することでフィードバックを行った。

【第十三回】報告書の作成

最後にもう一度、翻刻の担当範囲を移動させて確認作業を行った。その上で、これまでに翻刻した史料を読み直し、考察を加えて提出させた。その際は、提出物のフォーマットを作成し、全グループの成果を一つにまとめやすいよう準備した。

【第十四回】レポート提出

二つの課題を出した。①グループで翻刻した史料を読み直し、訂正箇所があれば赤字で示し(なければそのまま)、再度提出する。これは、グループ内では自信がなかったり、言い出しにくかったりして発言できなかった意見を引き出そうと考えて課したものである。②レポート(史料を使って板橋宿について解説する、八〇〇字以上)を提出する。なお、ここでの史料は、「伊勢孫文書」に限定していない。

学生A	学生B	学生C	学生D	学生E
5-1の8.9行目と5-3の4行目から最後まで担当します。	□□□結構進めてくれるねー ありがとう！ でもどう割り振ろうかな？5-2を僕は終わらせてみます。 割り振りが難しそうなので、各自ちょっとづつやっつけていきましょうぜ！	5-1の10.11行目と丸の部分埋めます。	少し進めます。 5-1は上の4行(覚を抜いて) 5-2は1行 5-3は3行を書いたよ	□□□が書いてくれた5-1の続きで、細かい部分を含めた5行分書きます。
返信遅くなりすみません。分かりました！とりあえず自分の担当の場所を頑張ってみます。もし何か思いついたら、()して書いてみようと思います。	取り敢えず新しく直すのは前回担当した所をやるのがいいかな？担当外でもここは別の漢字が入るかも？とか○の所があったら隣に()とかして新しく書いてみるのもいいかもねー まあ臨機応変に頑張ろうぜ！	了解です。同じく何かあったら訂正します。	了解、開始が遅くなつてすみません。自分の所完了しました。	了解です。とりあえず他の班の翻刻をみて、何かあったら訂正しますね。
了解です。 □□が担当した5-2やってみます。	了解です！□□□の所担当	了解です。全然気になくていいよ。とりあえずやってみるね。	右隣□□□のやつですね。了解しました。俺が最初やりすぎてしまったばかり、□□□のやるどころ多くなりすぎた。ごめんね。以前自分がやったところも少し直しました。	担当箇所完了しました。
了解です。□□□の所担当します！！		了解です。□□□の部分を担当します。(6月30日)	またやるみたいだね。もう1つ右隣の人の範囲をやりましょう！！ 自分は□□	今週はこのチャット欄で自分の右隣の人の部分を担当するということでもいいですかね？
				了解です。□□□の部分担当します。(6月29日)

【図1】グループワーク用 Google ドキュメント (□□□には学生の名前や呼び名が入る)

【第十五回】グループ発表とフィードバック

当初は、グループごとに発表動画を作成することを予定していたが、オンライン上でのやりとりだけでは難しかったため、報告書による発表に変更した。ここでいう報告書とは、グループで翻刻した史料と各自の考察を一つの Word ファイルにまとめ、PDF に変換したレポートである。タイトルは、「板橋をあるく4―伊勢孫文書―の翻刻―」とした(全四五頁)。

この回は課題を二点出した。①報告書を読んで学んだこと・感想を書くこと(Google フォームから回答)、②報告書のうち所属グループの範囲をダウンロードし、各自が担当した範囲を赤字で示して報告すること、である。②の報告は、実態と異なる場合もあるため、個々の成績評価ではなく、ふりかえりとして実施した。

(三) 板橋区立郷土資料館での文書調査

前述のように、文書調査は教員のみが五月二十一日(金)の午後に実施した。法量の計測では、同館学芸員の河野彩里氏に補助を依頼した。

撮影した写真のデータおよび本稿で紹介した史料の翻刻データは、前回と同様、板橋区立郷土資料館へ提供している。

(四) 成果と課題

本年度の授業における成果と課題について、いくつかの項目に分けて整理してみたい。

① 板橋(宿)の歴史を学ぶ

【成果】動画の説明や文献の配付に加え、説明を聞いた上でさらに学生が知りたいことを調べたり、クイズを考えたりといった課題を課した。二〇二〇年度は、学んだことの概要をまとめさせたところ、配付資料からの引用が多かった。だが、本年度は学生が調べて見つけた参考文献を載せているケースも見られ、昨年度よりも主体的に学生が課題に取り組んでいたことがうかがえる。

また、板橋宿跡のフィールドワークでは、Google Classroomのスライド(Google Earthの機能を活用して作成)を見てから、現地を歩くことを課題としていた。昨年度は、緊急事態宣言が発出されたため、実際に板橋宿跡を歩くことができず、同様のスライドを見てバーチャルフィールドワークを行った。

しかし本年度は、個々の学生のペースで、スマートフォンからこのスライドを確認しつつ歩くことができたとの報告があった。本授業では履修者数が増え、全員で街中を歩くフィールドワークが難しくなっていた。またコロナ禍にあつて、密を避けたフィールドワークが必要とされている。そのため、この手法は今後も活用できる手法であり、新たなフィールドワーク授業の方法を見出せたといえる。

【課題】現地でスライドを見ることを想定したスライド作りが必要であろう。

② 文書調査と翻刻作業

【成果】文書調査は実施できなかったが、動画の説明によって要点の理解はできたと思われる。また、学生が翻刻した史料(提出物)を見ながら解説し、文字を読む際のヒントを与えた動画を配付した。そのため、

積極的に教員へ質問ができない学生も、平等に説明を受けることができたという利点はあったと思われる。

【課題】想定していた以上に本授業を履修する学生が多かった。そのため、当初予定していた金曜日午後の半日では、コロナ禍における感染対策をとりつつ全学生に調査を体験させることは難しかった。履修者の増加にも対応できるよう、土曜日の一日を調査にあてるなど、スケジュールを考え直す必要がある。

また、この授業で初めて古文書を読む学生も多かった。結局、ほとんど翻刻できなかったり、間違いばかりだったりしたグループもあった。動画による指導には限界があり、史料も学生が初めて読むものとしては、難易度が高かったと考えられる。翻刻作業は、本来ならば教員が直接指導し、学生同士が協力し合った方が進めやすい。コロナ禍にあつて難しい判断をとまなうが、オンデマンドだけではなく、対面授業も組み合わせるなどの配慮が必要となろう。

③ グループワーク

【成果】二〇二一年度の前学期は、一部で対面授業が始まっていたこともあり、同年度の学生同士ではグループワークはある程度できていた。前述したGoogleドキュメントを使ったchat(伝言板)は、グループワークの過程が文字として残り、グループワークの様子を確認しやすい。所謂フリーライダーの存在も把握しやすいといった利点もあった。対面の授業でも活用できるだろう。

【課題】二名ほど、途中から課題を提出しない学生が出てしまった。対面の授業以上に、オンラインでは授業についていけなくなる学生が出

やすいと思われる。ただ一方で、対面授業の出席は困難だが、オンライン授業には出席できるケースもあった。また、学年が異なるグループでは、対面授業以上にコミュニケーションを取ることが難しかったようだ。

やはり、オンデマンドだけではなく、対面の授業も組み合わせることが有効だと思われる。対面授業も取り入れることで、グループワークの様子を観察し、コミュニケーションを取りやすい環境づくりの工夫を重ねる必要がある。

二 「伊勢孫文書」の紹介

(一) 翻刻の範囲と凡例

「伊勢孫文書」の説明は前稿を参照していただくこととし、ここでは本稿で紹介する史料について説明し、凡例を示しておきたい。⁽⁸⁾

本年度は、板橋区の目録「区内文化財データ・ベース」の項目「分類②」の番号一四―二二〇～一四―五一五(目録No.五十三～八二)、前回の調査で未撮影だった一四―一六(目録No.三二)を調査・撮影した。授業では、これらの史料を一〇グループに配分して翻刻をした。

だが本稿では、授業では扱っていない、前回撮影したものの未翻刻だった「分類②」番号一四―二二―一四～一九(目録No.四七～五二)の史料紹介も併せて行いたい。

本授業における各グループのメンバーと翻刻の担当は次の通りである。
A (No.十四―一六・十四―二二〇を担当)

泉海斗(四年次生)・藍原淳・武藤輝・國谷竜宏(三年次生)

B (No.十四―三一・十四―三二を担当)

秋田夢羽・石橋映美・岩佐拳志郎・大木優輝・大嵩のの・大橋亮介
(二年次生)

C (No.十四―三一三・十四―三一四を担当)

岡部祥幸・小倉彩花・香月秀太・鎌形永遠・上甲美南(二年次生)

D (No.十四―三一五・十四―三一六を担当)

木村亜岐斗・小泉順・小嶋俊輔・品田晃平・庄司慧吾(二年次生)

E (No.十四―三一七・十四―四一を担当)

城取実優・鈴木葵・須藤深美・田岡真晴・高橋空也(二年次生)

F (No.十四―四一二・十四―四一三を担当)

萩野樹里・春山さくら・郭婉悦・竜見宙夢・田邊智大(二年次生)

G (No.十四―四一四・十四―四一五・十四―四一六を担当)

寺福智哉・戸ヶ崎太郎・春山桃那・古畑花音・富岡駿(二年次生)

H (No.十四―五一・十四―五二・十四―五三を担当)

本田匠・眞下小太郎・増田恒希・松本隆希・峰弦汰(二年次生)

I (No.十四―五一四)

松崎絢音・宮本涼花・吉川慧星・金子駿太・高橋杏(二年次生)

J (No.十四―五一五・十四―五一六・十四―五一七)

栗山瀨風・後藤惣一郎・田辺謙心・阿部翔大・野本一輝・片桐航太
(二年次生)

本稿で紹介する史料は、全て学生の翻刻を元に筆者が訂正を加えたものである。

〔凡例〕

- 欠損などにより判読できなかった文字は□で示し、字数も不明だった場合は「」で明示した。
- 文字の存在を確認できるが、判読できなかった場合は■で示した。また、文字の確定はできないものの、私見を示す場合は(*カ)とした。
- 重ね書きについては、「」で明記した。
- 印・割印や朱文字などの注は()で明記した。
- 法量(縦×横の長さ)を計測した史料は、各史料名の下に明記した。

(二) 史料紹介

一四―一―一六〔人数代銭覚〕(縦14.1×横24.0 cm)

五十六人 ■

人数百五十人

三十七貫

ズ十貫式十五文 泊り 百六十 ■

人数 壹石壹斗式升 泊り

惣ズ 泊り

八貫六百

三十五文

九月六日 ■^{より} 十月十九日迄

人数

惣ズ五百式十五人

此代銭三十五貫

米ズ三石七斗式升

此代

錢式十七貫百六十

惣ズ木十五貫

六十五貫

一四―二―一四〔金吹替および金銀換金率変更につき書状〕(縦16.0×横62.4 cm)

(封上書)

「板ばし

本郷

伊勢屋孫兵衛様

右

無事急用候

鳥渡奉申上候、残暑強く

御座候へとも、皆々様御揃

御壮栄奉寿慶候、然者、

昨夜内々ニ而両替屋方為知

参り候ニ者、此度御吹出しニ

相成申候ドル之方、壹歩銀計

多分、今日より式朱之

通用ニ相成申候由ニ御さ候間、

此段御承知ニも御出被成候哉、

鳥渡御しらせ申上候、若

御承知無之候ハ、成丈ケ

御早く御遣ひ可被成候、先ハ

右申上度、早々取急キ

用事而已早々、以上、

尚々御隣元様方江も

早々御伝言可被下候、

又々申上候、先々出申候方

壹歩銀者是迄之通りニ

御座候、どるの方計り直下ケ

のよし御さ候、

七月廿日

一四一三一五〔捨て物・虫附につき書状〕(縦16.0×横39.4cm)

〔封上書〕

会津屋

要助

自

吉見屋利兵衛様

浦和宿

※封に「武州・浦和」の印

足下

あり

前文御用捨可被下候、

然ハ先日板はし宿ろ

飛脚帰宅仕候所、

すて物○印若御望候

間、御安心可被成候、且又

右之預り之書附私方江

慥ニ預り置申候間、左様

御承引可被下候、

早々賀儀御都合次第

御急キ御入来可被下候、

先者右之段申上度

〔取込、または御取込方〕

■■、早々、

九月十三日 會津屋

要助

吉見や

利兵衛様

一四一三一六 覚 (縦16.0×横54.0cm)

〔封上書〕

「板はし宿」

伊勢孫様

萬屋 清兵衛

■(十一) 月十五日

覚

未正月廿九日貸出

一、醬油上万印

拾五樽

■々々四樽

代金〆三両三分

未三月廿一日貸出

一、同 八樽

同

✂ 金貳兩也

二同

✂ 金五兩三分

内金貳兩受取

内金貳兩受取

差引

✂ 壹兩三匁

不足

右之内二而、何岸場入用御引被下、
残金此者二御遣し候、可被下候、

鴻巣宿

十一月 萬屋清兵衛(印)

十五日

一四一七一七 寛 (縦15.9×横22.5 cm)

覚

四一

一、米六石

代金五兩三分

四一五

一、米三石

代金貳兩三分式朱卜

百十一文

✂ 金八兩貳分式朱卜

八壹百六文

老貫三百廿四文 上半入

右通り慥ニ受取申候、

十一月十八日 こくや

五郎兵衛(印)
(印文「武州鳩ヶ谷 穀五」)

いせ屋

孫兵衛様

一四一七一八 寛 (縦14.5×横19.8 cm)

覚

四一五

一、米三石

代金 貳兩三百貳朱卜

百九十文

駄ちん 四百十六文

右之通り受取申候、

十一月廿三日 平六(印)

孫兵衛様

※印文に「山平」の屋号、「武州」の文字が見える。

一四一三一九 寛 (縦14.4×横19.0 cm)

覚

四一

一、米三石

代金 貳両三分貳朱

三百四十一文

上(舟カ) ちん 四百廿四文

×金貳両三分貳朱

七百六十五文

右之通り慥ニ受取申候、

十一月廿三日

弥介(印)

いせや

孫兵衛様

※印文に「山二」の屋号、「武州鳩ヶ谷宿」の文字が見える。

一四一三二〇 寛 (縦24.8×横33.4 cm)

覚

一 杉板割 壹枚

一 大貫 四丁

一 小割 参本

一 松六分板 貳枚

一 六尺敷木 壹丁半

一 松六本 壹束

一 下身板 三坪程

一 半まい 九人前

一 釘 五百四十文

此金高

×金三兩貳朱余

是ハ増金と致候、

大工喜三郎ト遣候、

一四一三一 寛

(一紙目 縦16.2×横67.4 cm、二紙目 縦16.2×横30.1 cm、三紙目 縦16.0×横4.4 cm)

覚

四月廿九日

一、五枚 杉式間

七寸板割

代 拾壹匁五分

一、九丁 大貫

貳ばん

代 十三匁五分

一、九束 小割

代 四匁五分

一、三坪 板四分尺

代 拾五匁

同^{三冊} 一、拾枚 松六分尺

九寸十貫

代 八匁七分

同 一、貳枚 同六分尺

代 貳匁

同 一、三丁 同壹間

敷居

代 三匁六分

同 一、因炭六俵

代 貳十貳匁五分

惣

×為金壹兩壹分ト

六匁三分

六月七日

一、壹丁 松貳間

しきへ

極上々

代 三匁四分

同 一、壹丁 大貫

壹ばん

赤身

代 壹匁八分

同 一、拾本 上小割

代 五匁五分

同 一、壹坪 松六分板

尺小ふし

代 六匁

同 一、壹束 松貳間

六本

代 四匁六分

同 一、貳本 松丸太

貳り三寸

代 三匁

同 一、因炭貳俵

代 七匁

惣合

×為金壹兩參分ト

七匁三分

廿九^(五匁)分炭代引

×全壹兩壹分ト 受取(印)

六匁三分

右之通り 代兵衛(印)

子六月 植野屋

十五日 乙五郎

いせ屋孫兵衛様

一四一三一二 覚 (縦16.0×横31.0 cm)

覚

四月九日

一、金巻両式分卜 曲六柄

四刃七分四厘

入三貫四百文

此銀三十匁四分四リ

同 (印) 一、金巻両巻朱卜

六十式文

右之通り(印)二請取候 以上、

酉 井筒や

五月廿五日 善五郎(印)

伊勢や孫兵衛様

一四一三一一 覚 (縦15.7×横54.8 cm)

覚

三月

十二日 はじめ

一、巻人 吉

十五日

一、半人 吉

十四八日

一、式人 吉・

留

廿四日

一、式人 吉・

安

廿九日

一、式人 同人

四月

一日

一、巻人 吉・半人ツ、

安

五日

一、式人 同人

六日

一、巻人半 同人

七日

一、巻人 吉

八日

一、巻人 吉

八拾四人

此金式分式朱卜

四刃五分

右之通り

二請取申候、

吉 四月 大工喜三郎(印)

十日

いせや孫兵衛様

一四一三十四 覚 (縦16.5×横62.7cm)

覚

二月四日

一、大工手間 四匁式分割 貳人

一、五日 半人

一、五日 まわたし 壹人

一六日 五匁五分割 貳人

一、七日 貳人

一、九日 貳人

一、廿一日 壹人半

一、廿二日 半人

一、廿三日 半人

一、廿四日 壹人

一、せついはほこ 半人

一 内のり 四匁式分割 貳人半

大工手間拾六人

此代八拾目式分

一、金^(老)分式朱ト式匁五分

こしかけ

一、惣^大金貳兩ト二分

一、内金壹兩 かり

月^{(×■)三分}金三分ト式分残り

右之道り^(通)

髓ニ受取申候、

二月朔日

いせ孫様

大工留五郎

一四一三五 覚 (縦16.2×横42.9cm)

覚

一、四拾壹匁七分五り

右通り十一貫

一、拾二匁 手間四人

一、壹匁 ふにも

黒かみ代

大五拾四匁七分五り

此金三兩二朱ト

廿四文

内三兩受取候、

引^①残り
金^②式朱ト

二百廿四文

右之通^③慥ニ受取候、

七月七日

龜吉(印)

いせや様

一四一三一六 覚 (縦15.9×横33.0 cm)

覚

一、人手間八人

代^④老兩式朱ト

老^⑤匆五分

右之通^⑥り慥ニ受取申候、

大工

喜三郎(印)

子七月十四日

いせや孫兵衛様

外^⑦

一、老丁 松九尺

ふしなし しきへ

代三匆

一四一三一七 覚 (縦16.0×横47.8 cm)

覚

一、左官^⑧庭 式人

五月十五日

一、同 半人

一、手伝 半人

廿一日

一、左官^⑨庭 半人

廿四日

一、同^⑩庭 式人

六日三日

一、同 半人

十日

一、同 式人

同

一、手伝 老^⑪人半

廿六日

一、左官^⑫庭 式人

廿七日

一、同 老^⑬人

廿八日

一、同 式人半

同

一、手伝 壹人
左官

拾三人

手伝 三人

手間代

五拾四匁六分

九百文

金壹兩卜

三百三拾式文

右之通

左官

松五郎

一四一四一一 寛 (縦24.3×横10.2 cm)

覚

一、金貳分卜 炭代^(金力)

六百

右之通槌ニ受取申候也、

子三月二日 植のや

いせや孫兵衛^(印)

※印文に「戸田」「川」の文字が見える。

一四一四一二 寛 (縦24.0×横8.5 cm)

覚

一、^(印)五分式り

右者当酉年御伝馬役金槌^(印)請取申候、い上、

西十二月卅日

助左衛門^(印)

六右衛門代

孫兵衛殿

一四一四一三 送状之事 (縦24.0×横20.9 cm)

送状之事

野村善太郎始

一、^(印)十 糯米 貳俵 四斗入

一、^(印)十^(枕カ) 割 四^匁 五斗入

茂呂村

種屋傳七殿出

たちん壹貫貳百間御払申候、

^(印)

右之通差送り十九^匁着、御改受取可置、

申 小^匁

極月六日 上州や伝兵衛^(印)

板橋

伊勢や孫兵衛殿

一四一四一四 覚 (縦24.5×横11.0 cm)

覚

一、壹貫文^(印)

右者、當^西七月^右同十二月迄、代役銀槌受取

申候、以上、

問屋

七月十四日

新左衛門(印)

孫兵衛

一四一四一五 覚 (縦24.2×横10.0 cm)

覚

一、灰

六俵

右者、此者二御遣し可被下候、以上、

八月廿三日 板ばし

丹波屋

いせ屋孫兵衛(印)

小兵衛

一四一四一六 (二ツ橋屋敷内高野殿小頭覚) (縦24.9×横10.7 cm)

一ツ橋屋敷内

高野殿

小頭

土井嘉吉

山田久吉

一四一五一 覚 (縦24.3×横33.6 cm)

覚

一、白米四兩三分式朱ト

外二又式朱

一、金^(印)壹分ト

七百文 時かし

一、四百文 時かし

一、貳百文 時かし

一、壹貫九百三十文 損料代

一、百八十四文 たはこ

まき

そんりゃふ

惣不

×金五兩壹分ト

三貫四百十八文

右之通、諸勘定不^(印)残槌請取

申候、以上、 いちや

利左衛門^(印)

辰

十月廿日

いせや

孫兵衛様

※印文に「伊勢屋」の文字が見える。

一四一五一二 覚 (縦24.3×横32.0 cm)

覺

一、金式分■ 米代内金

右通懺^(印)受取申候、

西ノ十二月廿六日

ふちや

定七(印)

伊勢屋孫兵衛様

代米 蔵

一四一五一三 覚 (縦24.8×横17.8 cm)

覚

一、金壹両ト三百十九文

一、五十式文

メ金壹両ト三百七十壹文

右者、御傳馬役金懺^(印)受取申候、

戌十二月大晦日

藤兵衛

孫兵衛殿

一四一五一四 [菜種・小松菜発送につき書状] (縦23.1×横27.6 cm)

弥御勇健^ニ被成御座珍重^ニ

奉存候、然者つけ菜種

三升・小松菜五升急々^ニ御送り

可被下候、乍御セ話濱川藤田屋出

しのり共^ニ、一國^ニ而岡づけ^ニ

御送り被成可被下候、何卒申兼候得共、

濱川への御状御持参之上、右之

のり持来り、^{菜種共^ニ}早々御送り可被下候様、

奉頼入候、弥入申候、以上、

二月十九日 上州茂呂村

菊池伝七

板橋宿

伊勢屋孫兵衛様

一四一五一五 覚 (縦27.3×横18.9 cm)

覚

一、式

拾九匁

杉六分尺メ

但シ式匁ツ、拾四枚半

一、三拾匁

五人手間

但シ六匁

メ五拾九匁

右之通り

膳箱 二ツ

わん 同 二ツ

てう子同 一ツ

さら 同 一ツ

四月十四日

一四一五一六 「御守・金入など遺失物につき覚」(縦24.7×横9.0 cm)

一、嶋天の守入 金入 一ツ

■類之儀者

四月十七日

相知不申候、

板橋

いせ孫殿 上サ九十九里

粟生村

音松

一四一五一七 覚(縦24.7×横16.6 cm)

覚

尾州様御泊り

御壺人分二付 但シ

米八合ニ金壹朱つゝ

両ニ式斗三升五合かい

メ拾人様分米代拾九匁六分

此金壹歩壹朱ト

式百拾七文

式口メ金三^(分カ)三朱ト

式百拾七文

右之通り慥ニ御渡申候、以上、

四月廿八日

金子屋より

孫兵衛殿

〔謝辞〕今回の授業を進めるにあたっては、多くの方々にたいへんお世話になりました。板橋区郷土資料館の河野彩里氏をはじめとする職員の皆様、板橋区公文書館の皆様、そして学生個々のフィールドワークでお世話になった地域の方々と同関係者各位に、厚く御礼申し上げます。

また、板橋区公文書館の西光三氏、鈴木雅晴氏には、翻刻作業にて多くのご教示を頂きました。この場をお借りして感謝申し上げます。

注

(1) 拙稿「志村延命寺・前野町東熊野神社・志村熊野神社の石造物調査―板橋区志村地域におけるフィールドワーク授業の実践例―」(『淑徳大学人文学部 研究論集』第三号、二〇一八年)、拙稿「板橋宿の研究動向とフィールドワーク授業の実践例」(同前第四号、二〇一九年)を参照されたい。

(2) 拙稿「板橋宿『伊勢孫文書』の調査報告と史料紹介―フィールドワーク授業の実践例―」(『淑徳大学 人文学部 研究論集』5号、二〇二〇年)を参照されたい。

(3) 板橋宿および「伊勢孫文書」については、『板橋区史 通史編 上巻』(板橋区、一九九八年)、板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『文化財シリーズ第九八集、板橋宿の歴史と史料―宿場の街並みと文化財―』(板橋区教育委員会、二〇一七年)、『板橋区史 資料編五 民俗』(板橋区、一九九七年)、拙稿前掲注(2)に詳しい。

(4) 拙稿「板橋宿の歴史を学ぶオンライン授業の実践例―二〇二〇コロナ禍での大学教育の記録―」(『淑徳大学 人文学部 研究論集』第六号、二〇二一年)。

- (5) 人文学部では、対面授業での使用教室数が多く、オンライン授業用に空き教室やリーススペース、PC設置教室を確保することが難しい。そのため、リアルタイムでのオンライン授業は原則禁止となり、対面授業とオンライン授業の混在は防ぐ必要があった。
- (6) 昨年度は、本学部としてはGoogle Classroomを使用するか否かの判断は教員に委ねられていたが、本年度は原則全授業で採用することとなった。
- (7) 板橋区立郷土資料館のご厚意により、文書調査が可能となった。記して感謝申し上げたい。
- (8) 前掲注2拙稿。

えんどう ゆりこ…淑徳大学 人文学部 教授